

乳幼児を育てる共働き夫婦が生活において最も困っていること テキストマイニングによる自由記述分析 The most troublings for working couples with children

広島国際大学健康科学部医療福祉学科 梅田 弘子
UMEDA Hiroko

キーワード： 共働き夫婦 子育て 生活 困っていること テキストマイニング

はじめに

我が国の共働き世帯数は2019年に1245万世帯となり専業主婦世帯582万世帯の約2倍となって増加の一途を辿っており(厚生労働省、2020)夫婦の育児の協働「コ・ペアレンティング」(McHale, et al, 2011)は重要な課題である。なかでも育児に最も手がかかり、成長発達の重要な時期である乳幼児を育児中の共働き夫婦に対する仕事と家事・育児の両立支援は喫緊の課題である。わが国の子育ての歴史を振り返ると、戦後の高度経済成長期に、性別役割分業意識に根ざした母親中心の育児が中心となった経緯から、母親を対象とした研究が圧倒的に多く、夫婦双方の育児に同時に焦点をあてた研究は少ない(青木、2009)。近年の調査結果からは、共働き家庭の妻の家事育児時間は夫の2倍以上である(内閣府、2019)ことが報告され、共働きであっても妻が‘ワンオペ育児’に近い状況に見舞われ負担の大きさが推察される。また、共働き家庭の夫からは、妻の育児に関する負担を危惧し、どのように妻と協力していけばよいのか戸惑う声も多い。そこで、本研究は乳幼児を養育中の共働き家庭において、夫、妻がそれぞれどのようなことに困難を感じているのか、その具体的内容を明らかにすることで、夫婦の協働のための育児支援への示唆を得ることを目的とした。

I. 研究目的

本研究の目的は、乳幼児を養育中の共働き家庭において、夫婦がそれぞれどのようなことに困難を感じているのか、その内容を明らかにし、育児支援への示唆を得ることである。

II. 研究方法

1. 対象と調査方法

A県B市・C市の保育園に通う乳幼児を育児中の共働き夫婦1081組2162名に対して、郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。B市、C市の保育行政担当部署に出向き、研究計画を説明し研究への協力を依頼した。B市・C市より協力保育園の紹介を得て、合計56カ所の保育園で保育士を通じて世帯単位で両親への配布を依頼した。調査票の回答は夫婦で相談せず、夫婦個別に研究者あての返信用封筒に厳封し郵送を依頼した。

2. 調査期間

「広島国際大学人を対象とする医学系研究倫理委員会」による審査を受け、広島国際大学長の承認

(2015年9月14日承認倫理審査承認、番号：倫15-072)を得た後、2018年12月までの期間とした。

3. 調査内容

基本属性と「現在の生活において最も困っていること」(自由記述)について調査した。

4. 分析方法

回答者の属性は記述統計量を算出した。自由記述内容は、テキストデータを客観的に分析するテキストマイニングの手法を用いて分析した。テキストマイニングは、基本的にはテキスト(文章)をマイニング(情報発掘)することであり、定性的な特徴を持つテキストを定量的に分析すること(小木、2015)である。テキストデータを単語、形態素など言語上の意味ある最小単位で区切り、膨大なテキストデータの中から、言葉の出現頻度や言葉同士のパターンや規則性を見つけることで有用な情報を抽出する手法・技術である。日本語の自然言語処理技術は英語に比べて難解であったが、研究・技術革新により高い機能を実現し、注目される技術である。テキストマイニングの活用により研究者の主観に影響されない質的データの分析が可能となる。今回は、Text Mining Studio 6.0を用いて単語頻度分析、単語の共起と係り受け関係を表すことばネットワーク分析を行なった。手順は、記述されたテキストデータを一文ごとに入力しCSV形式のファイルで保存をした。CSVファイルをテキストマイニングに読み込み、前処理としてテキストデータの分かち書き(単語分類・構文解析)を行った。次に、原文を参照しながら類義語辞書・分割辞書・ユーザ辞書を設定し分かち書き作業を繰り返した。そして、基本統計量の算出を行い、どのような単語が何回出現するのかカウントし結果表示する単語頻度分析、アソシエーションルールに従って解析したことばとことばの関連を信頼度を基準に重要な共起関係を抽出して有向グラフとして可視化することばネットワーク分析(服部、2010)を行った。ネットワーク図は出現数の多い単語ほど大きい円、強い共起関係ほど太い線で表される。分析結果については原文を参照しながら確認を繰り返し信頼性・妥当性を高めた。

5. 倫理的配慮

研究対象者に対して、研究目的、方法、非協力による不利益は一切ないこと、データ管理方法、研究結果の公表、調査票の個別返送をもって研究協力への同意を得る旨を説明した。調査対象者の夫婦ペアを特定するために、父親用・母親用の調査票1枚目の右下に夫婦同一のナンバリングを付記したものを配布したが、これは個人を特定するものではなく夫婦を一致させるための番号である旨を依頼文章に記載し説明した。「人を対象とする医学系研究倫理委員会」による審査を受け、所属機関長の承認を得て実施した(倫理審査承認番号：倫15-072)。

III. 結果

1. 対象者の基本属性

夫婦1081組2162名に調査票を配布し、668部(回収率30.9%)が回収された。そのうち夫婦ペアで回答に不備のない274組548部(回収率25.3%)を有効回答として分析の対象とした。平均年齢は夫が36.9±5.7歳、妻が35.5±5.0歳であった。正規雇用の割合は夫が271名(98.9%)、妻は156名(56.9%)であった。子どもの数は平均2.05±0.86名、約9割が核家族であった。育児に対して237世帯(86.5%)が「援助あり」と回答し、その内訳は祖父母からが208世帯(87.8%)を占めていた(表1)。

表1 対象者の属性 (n=548 274世帯)

平均年齢	夫	36.9±5.7歳
	妻	35.5±5.0歳
収入	夫	200万円未満:7(2.6%) 200~500万円未満:185(67.5%) 500万円以上:82(29.9%)
	妻	200万円未満:148(54.0%) 200~500万円未満:108(39.5%) 500万円以上:18(6.5%)
労働状況	夫	正規271(98.9%) 非正規3(1.1%)
	妻	正規156(56.9%) 非正規118(43.1%)
労働時間	夫	週あたり日数:5.35±0.58日 1日平均労働時間:9.18±1.78時間
	妻	週あたり日数:5.04±0.67日 1日平均労働時間:7.09±1.70時間
定時に帰宅しても	夫	そう思う:188(68.6%) そう思わない:86(31.4%)
職場から圧力を受けない	妻	そう思う:234(85.4%) そう思わない:40(14.6%)
子どもが病気時休んだり早退を	夫	そう思う:192(70.1%) そう思わない:82(29.9%)
受け入れられる風土がある	妻	そう思う:228(83.2%) そう思わない:46(16.8%)
子ども数(世帯あたり)		1人:71(25.9%) 2人:135(49.3%) 3人:56(20.4%) 4人以上:20(4.4%)
通園中の子の数(世帯あたり)		1人:190(69.3%) 2人:77(28.1%) 3人:7(2.6%)
通園中の子の年齢		0歳:3(0.8%) 1歳:39(10.6%) 2歳:53(14.5%) 3歳以上:269(74.1%)
家族形態(世帯数)		核家族:246(89.8%) 拡大家族:28(10.2%)
育児に対する援助(世帯数)		援助あり:237(86.5%) 援助なし:37(13.5%)
援助あり:内訳		祖父母:208(87.8%)祖父母とそれ以外の親族:10(4.2%)友人:3(1.3%)その他:16(6.7%)

2. 夫が「現在の生活において最も困っていること」

夫が「現在の生活において最も困っていること」の基本統計量は、記述あり141名(51.5%)、記述なし133名(48.5%)であった。記述ありのうち「特になし」が38名(全体の13.9%)であった。総文章数297、平均行長11.6字、延べ単語数714、単語種別数306であった。単語頻度分析では、「子ども」(20回)、「金銭面」(18回)、「時間」(17回)、「妻」(12回)、「仕事」(11回)の順で多かった(図1)。

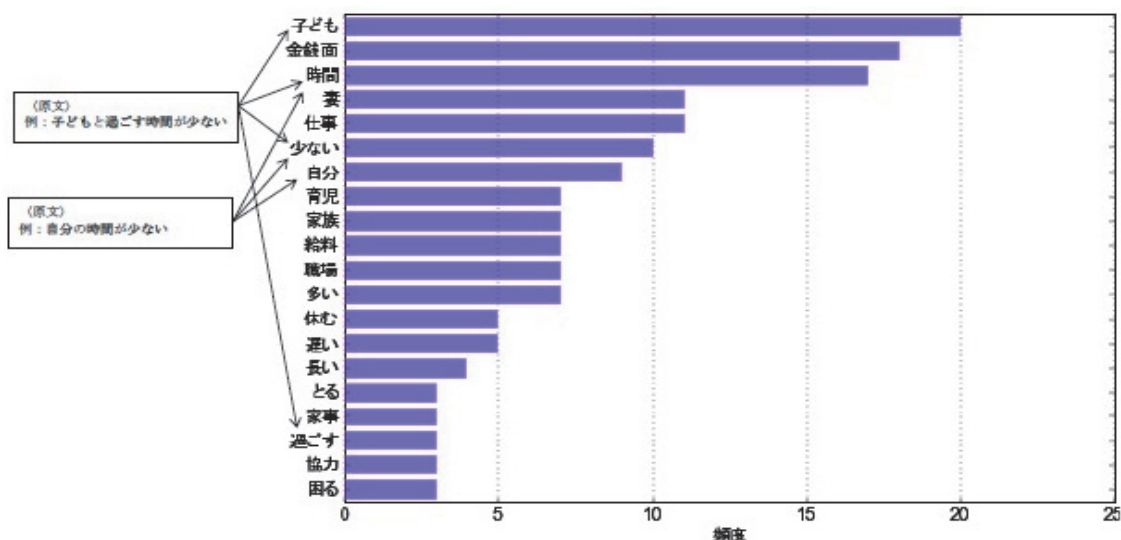
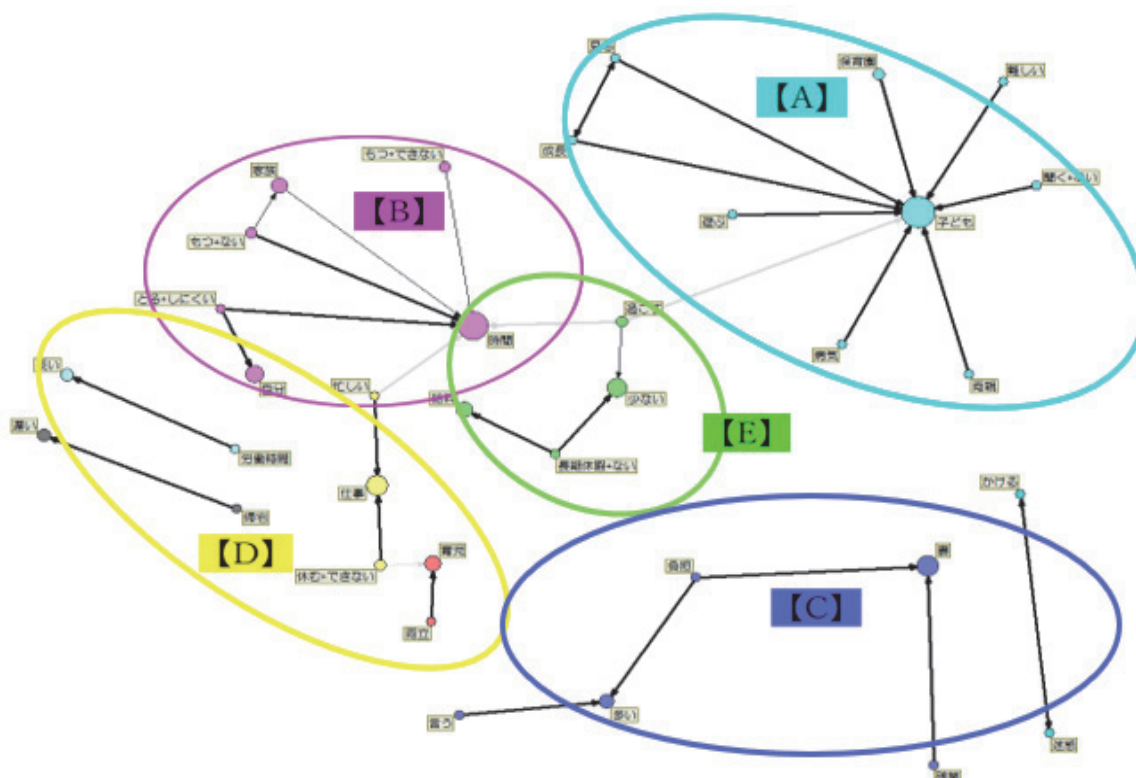


図1 単語頻度分析結果(夫群)

共起関係を2回以上としたことばネットワーク分析の結果、【A】子どもと過ごす時間が少ない、子どもの成長など子どもの内容、【B】自分の時間や家族との時間を持ってないなどの時間に関する内容、【C】妻の負担に関する内容、【D】仕事が休めず育児の両立が難しい、労働時間が長く帰宅時間が遅いなどの仕事に関する内容、【E】給料・休暇が少ないこと、の5つのクラスターが見出された(図2)。

梅田：乳幼児を育てる共働き夫婦が生活において最も困っていること



【A】子どもとのこと 【B】時間 【C】妻のこと 【D】仕事のこと 【E】給料・休暇のこと

図2 夫が生活において最も困っていることのこばネットワーク

3. 妻が「現在の生活において最も困っていること」

妻が「現在の生活において最も困っていること」の基本統計量は、記述あり 173 名(63.1%)、記述なし 101 名(36.9%)であった。記述ありのうち「特になし」が 17 名(全体の 6.2%)であった。総文章数 413、平均行長 19.3 字、延べ単語数 1218、単語種別数 434 であった。単語頻度分析では「子ども」(70 回)、「仕事」(39 回)、「時間」(37 回)、「自分」(27 回)、「病気」(26 回)、「夫」(26 回)、「金銭面」(19 回)、「少ない」(13 回)、「家事育児」(12 回)、「育児」(11 回)の順で多かった(図 3)。

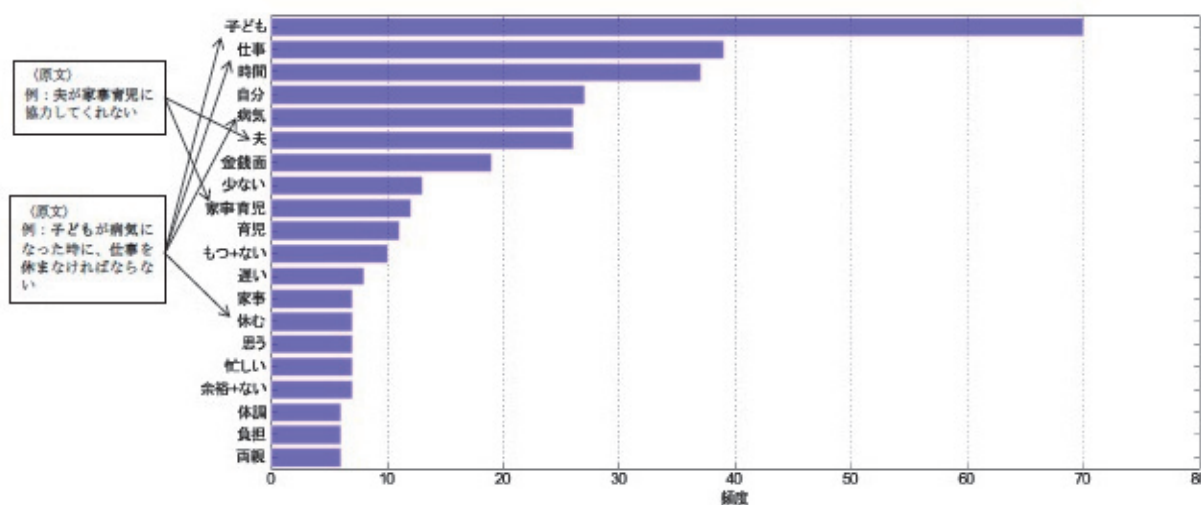


図3 単語頻度分析結果(妻群)

1. 夫と妻の「現在の生活において最も困っていること」に関する記述量の違い

記述した人数は妻が夫よりもおよそ1割多く、「特になし」と記述した人数は夫が13.9%、妻が6.2%で、妻の倍以上の人数の夫が困っていることは「特にない」と回答しており、ペアデータではあるが夫と妻で困っているかどうかについての認識に違いがみられる。妻の回答の延べ単語数は夫の1.7倍もあり、一般的に調査の回答は女性に比べて男性の方が記述内容・量ともに少ない傾向がある点を考慮しても、現在の生活における困りごとは妻の方が量・内容ともに多いことがわかる。出現単語の頻度では夫婦ともに「子ども」が最も多く、3番目に多いのは「時間」であり、困りごとが子どもや時間に関することは共通している。夫の2番目は「金銭面」で経済面の問題の認識が高いが、妻は2番目に「仕事」、5番目に「病気」とあり育児と仕事、子どもの病気が困りごとであると推察される。

2. 夫と妻の「現在の生活において最も困っていること」に関する記述内容の相違

共起関係を2回以上としたことばネットワーク分析の結果を示す図2・図4からは、夫と比べ妻のほうが明らかに困っていることの内容が多岐にわたっており、具体的であることがわかる。

乳幼児を育てている共働き家庭の夫が最も困っていることは、長時間労働や休暇がとれないことで「子どもと過ごす時間が少ない」、「子どもの成長を見ることができない」、「自分の時間や家族との時間が持てない」ことであった。そして、「妻の負担が多い」ことも困っていた。また、給料が少ないなどの経済面で困っていることがわかった。夫は、そもそもが、子どもと一緒に過ごす時間が取れていない実態があり、結果、家事・育児の具体的な内容の言及は妻に比べると圧倒的に少なく僅かであった。そして夫はこの状況について、家事・育児が妻に負担がかかっているとの認識を持っていることが示された。記述内容には、「妻の負担が多く協力してやりたいが仕事柄難しいことと妻が私に期待していない」や「妻の方がより育児に積極的に取り組み、自分は仕事育児の両立がうまくできていない」とあった。松田(2005)は、仕事と家庭生活の両立は妻の問題とみられがちであるが仕事から家庭生活へのコンフリクト(WFC)は、夫・妻ともに多いことを報告している。基本属性の結果からは職場からの理解は妻より夫の方が得られていない状況であり、夫が充実した家庭生活を確保できるように、労働環境の改善は急務である。父親が子育てに参画する意義(石井クンツ、2009、百枝、2012)は多数報告がある。夫が親として子育てに参画する意義を妻はもちろんのこと、社会全体で共有するとともに、夫婦に対する早期の段階からの共働き育児を想定したシミュレーションや教育的介入が求められる。さらに、単語頻度分析では金銭面のことを妻は7番目に挙げていたが夫は2番目に多く挙げており、育児において夫は生活の糧を得るという経済面に対する役割認識が高いことが推察された。

一方、乳幼児を育てている共働き家庭の妻が現在の生活において最も困っていることは、子どもに関すること全般や子どもの病気と仕事に関連すること、帰宅時間が遅く子どもと過ごす時間が取れずに時間に追われている等の時間に余裕がないこと、疲労やストレスで自分の体調が優れず、頼る人がいないこと、夫の協力が得られない等の夫を中心としたこと、保育料が高いなどの経済面に関することが挙げられた。今回の対象者の約8割は子どもが病気時に職場の理解があると回答していたが、「子どもが急に病気になった時に頼れる人がいない」「子どもが病気で仕事を休まなければならないと仕事に迷惑をかけてしまう」「自分の仕事の都合で病気の子どもの周囲に負担をかけている」「子どもが自分

でない泣く」等、子どもが病気の際の対応や仕事との調整に苦労している記述が多かった。子どもが病気の際に仕事を休むことへは職場の理解が得られても、妻は職場に迷惑をかけたという思いや仕事が滞ることへの罪悪感を抱えながら、体調の優れない子どもの世話に向き合う状況が推察される。また、「仕事と家事育児の両立が難しい」「仕事が多忙で子どもとの時間が取れない」「自分一人で家事育児を抱え込んでいる」「夫が家事育児に協力してくれない」「自分の時間が取れない」ことから「ストレスがたまる」「自分の体調が優れない」状況で生活していることがわかる。「子どもにイライラしてしまう」「きつくあたってしまう」という記述も見られた。松田(2005)は妻の育児から仕事へのコンフリクト(FWC)が高いことを報告している。金井(2002)は、ワーク・ファミリー・コンフリクトの負荷が妻に大きく、その対処には限りある時間の配分と緊急時の資源の活用の問題があることを指摘している。妻に集中している共働き家庭の負担を夫との協働や社会資源の活用によって改善することが急務である。本集団は、比較的近い場所に祖父母世帯が居住しサポートが高い集団と思われたが中には「両親に頼ってしまう」というサポートを受けることにネガティブな感情を持つ記述もあり、妻がソーシャルサポートを肯定的に活用できるような社会心理的支援も同時に求められる。

3. 乳幼児を育てる共働き夫婦への育児支援への示唆

乳幼児を育てる共働き夫婦の夫は、子育てに参画したいが仕事で時間が確保できないため、育児家事の経験が自ずと少なくなる。そのことが妻の育児・家事の実施レベルとの差を拡大し、自信を培うことができず、参画をますます困難にさせているのではないだろうか。そしてそのことが妻の負担に拍車をかける要因になってはいないだろうか。筆者らの研究(梅田ら、2017)では家事時間について夫は妻と比べてその充足度、重要度の認識が共に低かった。重要度に対する認識の低さは、妻がそれを一手に引き受けてくれているからであろう。このことから、夫が育児・家事を自分ごととして捉えられるような働きかけが必要である。夫が職業上の責任を果たすだけでなく、家庭的責任を果たすことに意識を転換し行動していけるよう支援が必要である。これについては、夫の家庭的責任を果たす権利を保障するための労働環境等の社会システム側の改善が必要であるが、同時に夫自身が同じ家庭で生活する妻の抱える負担を正しく把握し、育児・家事に対する責任意識を認識し行動変容することが不可欠である。その際、既に妻側に偏っている育児家事行動の何を担うのか、妻と相談・調整することで、協働が進み、育児家事への参画がうまくいく可能性がある。久保(2017)の報告によれば家事・育児の夫の頻度が高い場合に妻の頻度が低いという負の相関関係がみられ、妻の負担を軽減している。親としての責任の果たし方は労働による経済的な側面への貢献だけではない。父親の子どもとの直接的な関わりが、子どもの成長発達に良い影響を及ぼすことについての認識を高める教育の機会が必要である。

乳幼児を育てる共働き家庭の妻は、子どもと過ごす時間が取れない、仕事と育児の両立、特に子どもが病気時の仕事との調整に困っていた。また日々時間に追われ、夫の協力が得られず、頼る人がいない、体調が優れない状態や疲労・ストレスを抱えていることが推察された。そして、その状況で何とか日常を送るために多くの育児・家事行動について効率を考えて遂行していると推察された。このままでは妻は心身ともに疲弊して家族システムがうまく機能しなくなり、子どもの成長にも影響が及

ぶおそれがあり緊急の支援が求められる。妻が限界を迎えてしまっただけからの対応では遅い。まずは、仕事と家庭の両立を時間的な余裕をもって遂行できるように生活の調整が必要である。この生活の調整にあたっては、家庭的責任を引き受けすぎないようにする妻自身の対策と、家庭生活と職業生活の両立のための職場や地域といった家庭外からの支援の両方が必要である。妻自身の行動に対する支援としては、妻の行動に影響を及ぼす妻自身の性別役割分業意識などの価値観を平等的性役割意識へ転換することや、過剰な家庭責任意識の低減への働きかけが挙げられる。産後や育休後の復職にあたり、バランスの取れた仕事と家庭の両立を目指して、復職後の生活をシミュレーションし、丁寧な準備をすることの必要性を理解し、両立に対して計画的に行動できるように働きかけることが必要である。

核家族化が進み、最近の子育ての孤立は深刻化している。日本の育児休業取得は8割以上が母親である。その間母子で過ごす時間が長くなり習慣化されると、母親は我が子との愛着を深める一方で、それゆえに夫や親族、保育園などの自分以外の者に我が子の世話を依頼することが困難な状況に陥ることも考えられる。一人で子育てをしている日常から、仕事に復帰する際、今日から保育園に子どもを預け、長時間の子育てから解放され、労働者としての社会とのつながりが再開するという清々しさと同時に、自分以外の者が我が子を大切に養育できるのだろうかと不安に駆られ、子どもを預け難い気持ちや子どもへの心配や罪悪感を持つ母親は少なくない。さらに、仕事という新しい環境への緊張や不安を抱えて家庭と仕事の両立への一歩を踏み出すのである。この変化は母親にとって想像以上に大きなストレスであるが、それを仕事で多忙を極め長時間労働にさらされている夫に相談することがはばかられ、母親は一人で考え乗り越えようとしているのではないだろうか。育児から育児と仕事の両立への移行を上手く乗り越え、新しい環境に適応していくことができるように、復職の時期を意識し、そこに向けて移行が段階を踏んで進められるように支援していく必要がある。そのためには、家族システムにおいて、バランスよく夫婦で家事育児が行えるように夫に家事育児を意識的に任せていけるような働きかけが必要である。3か月健診や1歳6か月健診など子どもの成長発達に関わる健診や親として子どもにどう関わるのかといった育児に関する教育プログラムはあるものの、母親に対しての、育児から育児と仕事への移行に関する支援は確立されていない。共働き育児がこれほどまでに増加している現代においては、移行支援は必要不可欠である。

さらに、乳幼児を育てる共働き夫婦の子育てにおいては、予測不可能な子どもの体調不良時の対応が課題である。本母集団の86.5%が夫婦以外からのサポートを受けており、その内訳は、自分の親(祖父母世代)が約9割を占め、内容は子どもが病気時の世話が最も多く、送迎、あずかり、育児全般、食事、と続いていた(梅田、2018)。共働き夫婦の育児においては、自分の親からの手段的サポートが多い。祖父母は、母親にとって子どもが病気時の対応や仕事との調整に困っている時の救世主のように存在しその存在の大きさがうかがい知れる。但し、祖父母世代が就労中の場合はサポート源となりえないことや、孫の世話に疲弊するケース、教育方針の違いや世代間ギャップにより親世代のストレスが増加する可能性も存在し、身近な存在で頼みやすいが故の様々な問題もある。さらに、中野(2019)は、祖父母世代(特に祖母)に頼っている限り、育児や介護などのケアはいつまでも女性のものであり続け、本来もっと関わるべき父親、そして職場や社会は変わらないことを危惧している。本研究は地方の都市に在住している共働き夫婦を対象とした調査であるが、夫婦の1日の労働時間の差が2時間

以上の世帯が60%を占めていた。よって、夫婦どちらかが労働時間を短縮した働き方を選択することで、仕事と育児を両立できるように調整している家庭が比較的多いことが推察された。都心部においては遠方から親を呼び寄せ支援を受けるケースもある。しかし、実家が遠くサポートを受けることが困難な場合も少なくない。中には子育てと親世代の介護のダブルケアに見舞われるケースもある。その際は社会環境システムに働きかけ、民間の病児保育サービスやファミリーサポート事業を活用することで対応していることが推察される。但し、その確保が難しい場合や経済的負担が大きいととなると、夫婦のいずれかが働くことを諦めるケースもある。筒井(2016)は、共働き家庭において夫が家事・育児に積極的に参画するだけでは家事分担の不公平性の問題が解決するのは難しいと指摘する。子育て支援については、「子ども・子育て支援法」に基づき、地域子育て支援センターや家庭訪問、日本版ネウボラなど、血縁関係にこだわらない支援が行政や民間団体によって数多く取り組まれている。しかし、仕事と育児の両立で精一杯の共働き夫婦は身体的・精神的、また時間的に余裕がなく、そのような支援にアクセスすること自体が簡単ではない現状もある。乳幼児を育てる共働き夫婦が、子どもと豊かな時間を過ごすことができ、子どもが健やかな成長発達を遂げるために、親としての責任を心身ともに健康で安心して果たすことができる仕組みを社会全体で充実させることが望まれている。

4. 研究の限界と課題

本研究における分析の対象は、274組、548名の夫婦のペアデータであった。母集団の大きさからいえることには限界があり結果の一般化はできない。また、約9割が核家族であるが、その大半は祖母から援助を受けているという特性があった。今後は、都市部で夫婦以外からサポートが得られない状況の共働き夫婦へ研究対象を拡大し、比較分析する必要がある。

IV. 結論

1 乳幼児を育てている共働き家庭の夫婦が生活において最も困っていることは、夫は子どもや家族と過ごす時間が少なく子どもの成長を見ることができない、妻の負担が多い、経済面であり、妻は、子どもに関すること全般や子どもの病気と仕事に関連すること、時間に余裕がないこと、自分の体調が優れず頼る人がいないこと、夫の協力が得られないこと、経済面に関することであった。

2. 乳幼児を育てている共働き家庭での現在の生活における困りごとは、夫と比べ妻のほうが多く、内容も多岐にわたっており、負担は妻に集中している。

謝辞：本研究にあたり、研究へのご理解をいただきご協力くださいました行政の関係者の皆様、保育施設の施設長ならびに保育士の皆様、アンケート調査にご協力いただきました対象者の皆様に深謝いたします。本論文は、広島国際大学大学院看護学研究科に提出した博士論文の一部を修正・加筆したものであり、日本小児看護学会第27回学術集会において発表したものである。また本研究はJSPS 科研費 JP15K20754 の助成を受け行った研究の一部である。

利益相反：本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

- 青木聡子(2009). 幼児をもつ共働き夫婦の育児における協同とそれにかかわる要因—育児の計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して. 発達心理学研究, 20(4), p382-392.
- 服部兼敏(2010). テキストマイニングで広がる看護の世界—Text Mining Studio を使いこなす—. ナカニシヤ出版, p166. 京都.
- 石井クンツ昌子(2009). 父親の役割と子育て参加—その現状と規定要因, 家族への影響について. 家計経済研究, 81, p16-23.
- 金井篤子(2002). ワーク・ファミリー・コンフリクトの規定因とメンタルヘルスの影響に関する心理的プロセスの検討. 産業・組織心理学研究, 15(2), p107-122.
- 厚生労働省(2020). 令和2年度厚生労働白書—令和時代の社会保障と働き方を考える—, <https://www.mhlw.go.jp/content/000735866.pdf> (2021年11月21日アクセス) p34.
- 久保桂子(2017). 共働き夫婦の家事・育児分担の実態. 日本労働研究雑誌, 59(12), 17-27.
- 松田茂樹(2005). 育児期の共働き夫婦のワーク・ライフ・バランス. ライフデザインレポート, 168, p.16-23.
- McHale, J. P., & Lindahl, K. M. (2011). Coparenting : A conceptual and clinical examination of family systems. Washington, DC, US: American Psychological Association.
- 百枝義雄(2012). 父親が子どもの未来を輝かせる. SBクリエイティブ, 東京.
- 内閣府(2019). 令和元年度 内閣府委託調査「家事等と仕事のバランスに関する調査報告書」. https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/balance_research_202003/07.pdf (2021年11月21日アクセス)
- 中野円佳(2019). なぜ共働きも専業もしんどいのか—主婦がいないと回らない構造. PHP新書, 東京.
- 小木しのぶ(2015). テキストマイニングの技術と動向. 計算機統計学, 28(1), p31-40.
- 筒井淳也(2016). 結婚と家族のこれから—共働き社会の限界. 光文社新書, 東京.
- 梅田弘子(2018). 乳幼児を育てる共働き夫婦の育児における協働の構成因子. 母性衛生, 58(4), p541-548.
- 梅田弘子, 島谷智彦, 長沼貴美(2017). 乳幼児を育てる共働き家庭の家族機能の特徴—夫婦それぞれの評価に着目して. 広島国際大学看護学ジャーナル, 14(1), p57-67.

Abstract

The purpose of this study was to identify the most difficult problems faced by dual-earner couples raising children. An anonymous survey questionnaire was administered to 1,081 couples raising their children in daycare centers. Data from 274 couples who responded to the questionnaire and 548 cases were analyzed.

As a result, husbands' concerns included "not having enough time to spend with children and family," "not being able to watch children grow up," "heavy burden on wife," and "financial hardship.

Wives' concerns were "child-related," "adjusting to child's illness and work," "lack of time," "poor health," "no one to rely on," "lack of cooperation from husband," and "financial difficulties.

Compared to husbands, wives' problems were more numerous and varied in content, indicating that the burden is concentrated on the wife.